

ら男神天照大神や素戔嗚を合わせ奉ろうとする気配が漂っている。日本第一の文字も、その流れの中にある。

●日本の降伏

その後、神功は武甕雷軍・騎馬軍団を率いて紀ノ川沿いの山道を駆けのぼり、纏向の都に向かって快進撃していた。夫の訃報を聞きつけたヒミコがこの道を駆け抜けた話は、子供でさえ知っていた。神功はそのヒミコの姿をそっくり真似ていた。敵方は白い喪服姿が神功だと気づきはしても、ヒミコに出会ったごとくにひれ伏し、その後は姿をくramsすること道をあけた。

北では、竹内・武振熊軍が木津(京都府)から攻め入る好機を窺っていた。これと対峙する大日本王開化の嫡子は、日本の敗北が必至と見るや、早々と竹内軍に寝返ってきた。彦坐王ひこいますと語る弟(日子坐王を襲名)も奈良坂の砦をあっさり明け渡して、兄とともに三輪に向かって慕進した。

☆後世に、兄が崇神天皇として立つと、この弟は丹波道将軍となって降って行った。

同じ頃、磐余彦軍も三輪山麓に怒涛のごとく殺到した。そこでは、長スネ彦に与する精鋭が水濠で困った石垣砦に立てこもり、徹底抗戦を叫んでいた。

磐余彦は総攻撃を繰り返して砦の一角を突き崩すと、長スネ彦の陣地に大軍を差し向けた。討手はしきりに長スネ彦を攻め立てたが、どうしても落とせなかった。すると、急に空模様が悪くなって金色の鴉が何処からか飛んできたかと思うと、磐余彦の天鹿兎弓に止まって照り輝いた。一瞬のできごとだった。



烏牛王(おカラスさん、千羽鳥)

東征軍はそれが経津主か高皇産霊の垂迹した姿、あるいは勝利の祥瑞と感じとった。片や、長スネ彦の将兵らは天照大神の発した戒めの靈光と見て恐れおののき、戦う氣力まで無くした。事態がこうまで悪化しては、饒速日も敗北を認めざるを得なかった。

時に二九八年末、饒速日は磐余彦に対して神璽の鏡も、天神の御子と印す天羽羽矢も差し出して降伏した。

結果からすると、磐余彦はこの靈光によって決戦するまでもなく日本を降し得たが、それは力で押し捲った末の勝利だったから、兵法極意を達成できたとは言いがたい。ここはむしろ、経津主または高皇産霊が垂迹してきたところに本意がありそうだ。つまり、磐余彦が高皇産霊に成り代わって郊祭できる資格を天から授かったと見るべきだろう。

この時の様子は、『日本書紀』に詳しい。これに少々書き添えて紹介したい。

★長スネ彦は、磐余彦に言上した。

「昔、天神の御子の饒速日が天降って来て私の妹を娶り、私もこの人に仕えました。あなたも天神の御子と申されますが、そちらの方こそ偽者でしょう」

「天神の御子が多い。主人が天神の御子なら、その印しがあるはずだ。それを示しなさい」と磐余彦が命じると、長スネ彦は饒速日の持つ天羽羽矢を示した。磐余彦はそれを見て、

「偽りではない。これは天鹿兕山の所持した天璽で、火天神の御子それぞれに与えられたものだ」と言って、自分の持つ羽羽矢を長スネ彦に見せた。それでも、長スネ彦はひれ伏すどころか戦う態度さえ見せていた。饒速日は長スネ彦が天神の御子と臣下の区別もわきまえなかったことで、その場で彼を殺害し、彼の配下全てを率いて帰順してきた。

「神武記」、「ここに饒速日命まいわちむ参赴きて、天つ神の御子に白ししく、『天つ神の御子天降りま

しつと聞けり。故、追いて參降り来つ』ともおして、すなわち天津瑞を献りて仕え奉りき」
「神武紀」、「皇師遂に長スネ彦を撃つ。連に戦いて取勝つこと能わず。時に忽然にして天陰
けて雨水ふる。乃ち金色の靈しき鴉ありて、飛び来りて皇弓の弭に止れり。その鴉光り擘煜
きて、状流電の如し。是によりて、長スネ彦が軍卒、皆迷い眩えて、復力め戦わず」、
「時に長スネ彦、乃ち行人を遣して、天皇に言して曰さく、『嘗、天神の子有しまして、天
磐船に乗りて天より降り止でませり。号けて櫛玉饒速日命と曰す。是吾が妹三炊屋媛を娶り
て、遂に兎息有り。名をば可美真手命と曰す。故、吾、饒速日命を以て、君として奉えまつ
る。夫れ天神の子、豈兩種有さむや。奈何ぞ天神の子と称りて、人の地を奪わむ。』とも
うす。天皇の曰わく、『天神の子亦多にあり。汝が君とする所、是実に天神の子ならば、必
ず表物有らむ。相示せよ』とのたまう。長スネ彦、即ち饒速日命の天羽羽矢一隻及び歩鞞を
取りて、天皇に示せ奉る。天皇、覽して曰わく、『事不虚なり』とのたまいて、還りて所御
の天羽羽矢一隻及び歩鞞を以て、長スネ彦に賜示う」
☆この時、磐余彦の年齢は三十代半ば過ぎ、饒速日は七十代前半だったろう。
磐余彦は饒速日が日向から天降つてきて封禅したことも、日本大物主大神と語ったことも、天
神の御子であることも知っていた。その彼が目の前で忠誠を誓ったことから誉めて寵愛した。
こうして、邪馬台国なる日本王朝は滅び、海幸彦と火火出見（山幸彦）の長い長い争いも幕を

閉じた。言い換えると、磐余彦は饒速日を天神の座から引きずり下ろして、単に天神の御子（天子）と悟らせたのだ。以後、日本家は和朝廷に組み込まれた。

☆このように宝器を差し出して降伏する習わしは、中国では古代から続いていた。周は春秋時代に滅ぼされそうになった時、青銅の九鼎を差し出そうとした。これは日本の天璽に相当するもので、舜から夏に、夏から殷へ、そして周に伝わったとされる。一説では、前王朝の天璽を鑄潰して造られたとも言う。

☆この機会に、赤塗りの弓矢についても触れておきたい。

周の康王が宜の地を巡行した折、太伯兄弟の子孫を呼び出して宜候になれと命じた。その時、周王は赤塗りの弓一・赤塗りの矢百などを宜候に授けた。これは、江南の墓から出た青銅器に鑄込まれていた。

『史記』「呉太伯世家」、「周武王は殷を倒した後、太伯・仲雍の子孫を探し求めて曾孫の周章を得たが、周章はすでに呉王に立っていたので改めて彼を呉に封じ、その弟の虞仲を周の北方、かつての夏の故郷に封じた。これが虞の虞仲である。虞はこうして諸侯に名をつらねた」『春秋左氏伝』、紀元前六三二年に、周王は晋（周の分家）の文公に赤塗りの弓一・赤塗りの矢百などを下賜した。文公はこの年に戦国の覇者となった人物だ。

『呉志』、呉の孫権は遼東の公孫淵が臣下に加わる由を伝えてきた際、赤塗りの弓一・赤塗りの矢百などを授ける詔を降した。

ここで、三世紀末の築造とされる黒塚古墳について考えたい。箸墓古墳と黒塚古墳は旧上之宮の真南と真北に位置している。五行説では、黒は北を意味するから、北郊と似た祭祀が黒塚古墳で行われた可能性が高い。

この儀式において、磐余彦側は葬送用の八咫鏡を副えて吊った。ついで邪馬台国側がヒミコか

ら授かる祝の八咫鏡（絹で包まれ、手擦れのある三角縁神獸鏡）を添えた上で、饒速日から賜った祝の鉄剣や葬送用呉鏡も棺の内外に並べ置いて冥福を祈った。

【黒塚古墳】（天理市柳本町）全長一三〇^{メートル}、後円部径約七二^{メートル}、高さ一一^{メートル}の前方後円墳で、周濠を備える。被葬者の頭部近くに画文帯神獸鏡一・鉄刀一・鉄劍一、木棺外に三角縁神獸鏡三三面があった。三角縁神獸鏡には絹で包まれた鏡、磨きの有る鏡と無い鏡、製作期が三世紀前半や後半の鏡が混在する。この外にも鎧の小札・鉄斧・鉄鏃などが出た。

そうだとすると、こう考えてよいのではないか。

一、画文帯神獸鏡は呉の領域の鏡とされるから、被葬者は火明饒速日に近い人物だ。

一、三三面の三角縁神獸鏡には、絹で包まれたもの、磨きの有るものと無いもの、製作期が三世紀前半と後半の鏡があることで、ヒミコの祝の八咫鏡と一緒に磐余彦の葬送用八咫鏡が埋納されたのは明白だ。

一、饒速日の祝の鉄刀が出たことは、日本王朝が滅び去ったことを教えている。

一、多量の鏡や鎧の札、それに絹・刀剣が出た割には、古墳が小さい。これから推して、被葬者の身分は高いが、来世での地位はそれほどでもなかった。

双方がかくも盛大な副葬品を副えたことから察すると、この被葬者は饒速日の傍に仕えて記紀にその名の残る王族か武将、強いて言うなら、大日本家、中つ国、日本系の実力者ではないか。

彼が戦死したのか、責任を取って自害したのか、それとも殺されたのかは定かでないが、和と日本がここで彼の亡骸を共に弔ったことだけは確かだ。ちなみに黒塚古墳の築造は、長スネ彦が殺害された時期とぴったり一致する。

こうすることで、磐余彦はヒミコと饒速日に忠誠を誓った祝の祭器を葬り去るとともに、大和

朝廷に忠誠を誓わせる儀式に置き代えた。以後の主だった古墳は、この儀礼に右倣えしたことで、銅鏡・鉄剣・玉など三種の神器が決まって出てくる。

一方、八咫鏡・草薙剣による先祖祭祀は高千穂宮時代に戻って、倭王だけの特権と化していった。☆大和朝廷時代になると、邪馬台国側の祝の鏡は、十握剣に似せた鉄剣とともに片っ端から古墳に副葬された。その結果、正倉院の宝物には邪馬台国時代の銅鏡が一枚も存在しない。

磐余彦は大倭一円を制圧すると、畿内に隠れ潜む残党に降伏を勧めて回る一方、刃向かう者に対しては力づくで追い払った。と同時に、邪馬台国側の主要な祭殿をとり壊し、その再建も認めなかった。こうしておけば、大乱を引き起こした三輪氏の祖霊が再び地上に降臨することはないし、天照大神御霊もこれに近づくことができない、と彼は考えたのである。

その後も、磐余彦は五瀬の仇を取りたいとして、徹底した残党狩りを命じていた。大神家についても元の三輪氏・太氏鴨族の二家に割った上で、三輪氏の先祖祭祀まで禁じた。

そのため、降伏を潔しとしない一派は徹底抗戦するか、どこかに隠れ潜むか、東国に逃げ落ちるしかなかった。大神家嫡流の太田田根子おおたねこ（大神武甕雷の児）でさえ、身分を隠して河内に潜んでいたほどだ。

【大神神社】おのみわ（桜井市三輪）、大和国一の宮。秀麗な三輪山を信仰の対象とした最古級の神社で、主祭神は大物主神。拜殿と三輪山との間に三輪鳥居があるのみで、神殿をもたない。

☆大神家の復活については、後日談がある。崇神期の奈良盆地では、二人に一人が死ぬという疫病が蔓延した。大神族はこの機をとらえて、「これは、祀ってもらえない霊の祟りだ」と言いふらすことで、太田田根子の復権と先祖祭祀、さらに三輪家再興も叶えた。結果、太田田根子は三輪氏・太氏鴨族の祖として仰がれることになる。

ところで、新しい国づくりを認めない日本派のアビ彦（長スネ彦の兄）らは、その後どうしたのか。彼らは生駒山に立てこもって徹底抗戦したが、結局は、敗れ去って一族もろとも東北の津軽に逃げ落ち、そこでも日本将軍と語って息巻いていた。

「饒速日は、敵と通じて日本王朝を売った。今、日本と語る資格があるのは、この我々だけだ」その頃の東北は、まつろわぬ者たち（中央に従わない勢力）が割拠する異国の地に成り果てていた。仙台平野でも日高見勢が独立国のごとく振舞っていた。

「景行紀」、「竹内宿禰、東国より還て奏して言さく、『東の夷の中に、日高見国有り。』

其の国の人、男女並に椎結け身を文けて、為人勇み悍し。是を総て蝦夷と曰う。亦土地沃壤えて曠し。撃ちて取りつべし』ともうす。」

【三春藩主だった秋田家ゆかりの子孫に伝わる伝説】、「安日王（アビ彦）は大和に住んで可美真手（饒速日の児）に仕えたが、神武軍が大和に侵入したので、弟の長スネ彦ともども生駒山に立てこもって戦った。しかし、長スネ彦は敗れて殺され、安日王は東北へ逃げ落ちた。その子孫は日本将軍と名のつた。秋田家はその一族だ」

昭和二十四年、青森県東北町石文の坪で、「日本中央」と刻まれた石碑が見つかった。この石碑は、古くからその存在が噂されてきた。平安時代の僧・顕昭は、こう書き残している。

「坂上田村麻呂がこの地に攻めて来た時に、弓のハズで大石に日本中央と書きつけた」

坪の碑が見つかるずっと以前の明治九年に、明治天皇は奥羽巡行に先立ち、この石碑を見たいと望まれた。この時、大がかりな石碑の搜索が行われたが、発見されず終いだった。